

東大泉の田舎の雑木林の真ん中に小さな一軒家を建てて、
われわれの永遠の棲家とした。 —— 牧野富太郎



記念庭園入口



記念館

富太郎が30余年暮らしたこの場所は「牧野記念庭園」として昭和33(1958)年12月1日に開園。この場所に残された富太郎の書斎「絳條書屋」の室内を再現した展示は令和5(2023)年春に完成しました。

練馬区立 牧野記念庭園

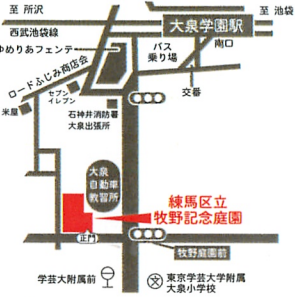
東京都練馬区東大泉 6-34-4
TEL 03-6904-6403

開園時間 午前9時～午後5時
(企画展は午前9時30分～午後4時30分まで)

休園日 火曜日(火曜日が祝日のときは開園し翌平日休園)
年末年始(12月29日～1月3日)



牧野記念庭園



障害者用駐車場(1台)があります。
事前にご予約ください。

交通案内

- 電車で西武池袋線「大泉学園駅」
南口より徒歩5分
- 主なバス経路
・JR中央線 荻窪駅／西武新宿線 上井草駅
から 西武バス「長久保行」
・JR中央線 西荻窪駅／西武新宿線 上石神
井駅から 西武バス・関東バス「大泉学園
駅南口行」
・JR中央線 吉祥寺駅／西武新宿線 武蔵関
駅から 西武バス「新産栄行」「都民農園
セコニック」他
- いずれもバス停「学芸大附属前」下車、
徒歩3分



この書斎再現展示プロジェクトは
「練馬みどりの葉っぱい基金」へ
のご寄付を活用させていただきました。
ご参加くださったみなさまに御礼申し上げます。

練馬みどりの
葉っぱい基金



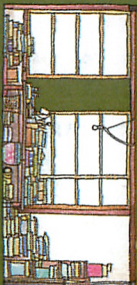
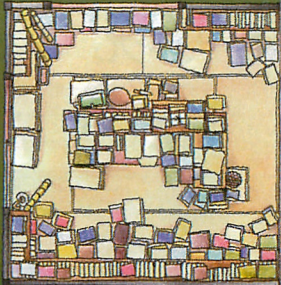
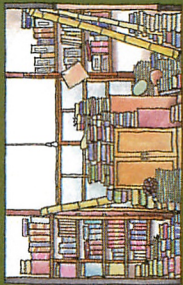
練馬区立
牧野記念庭園

書斎再現展示

LIBRARY OF T. MAKINO



植物学者が黎明期の日本で、1,500種類以上の植物に
名をつけ、植物の知識を広めた牧野富太郎。彼が30
年暮らした庭園に残された書斎が、その気配を感じ
られ場所として再生しました。



植物学者、牧野富太郎の最後の書斎が、ふたたび立ちあられる。

『絳條書屋』

ここは草木が宿る書斎

絳條：草や木が生い茂ること



牧野家のネコ
チーコ

伊藤正彦 制作15110212年



あるいは草木の精かも知れんと自分で自分を疑います。ハハハ

牧野記念庭園

― 博士が愛した植物園へようこそ ―



牧野記念庭園は東京都指定文化財(名勝および史跡)です。

牧野記念庭園とは

本園は、植物学者牧野富太郎博士が大正15年から亡くなるまでの30余年を過ごした住居と庭の跡地です。博士は、もともと広がっていた武蔵野の雑木林の中に、採集してきたり知人から取り寄せたりした植物を植え、庭を「我が植物園」として大切に育ててきました。そして、たびたび庭に座り込んで、植物の観察や採集をして、庭とともにある晩年を過ごしていました。博士がこよなく愛した地を一般に公開し、博士の偉業を末永く後世に伝えるため、昭和33年に庭園として開園しました。

園内には、スエコザサ、サクラ^{せんだいや}「仙台屋」、ヘラノキなど博士にゆかりの深い植物を含め300種類以上の植物が生育するほか、博士の使っていた書屋が残り、博士の在りし日の面影を今に伝えていきます。

牧野富太郎博士<略歴>

- | | |
|--------------|--|
| 文久2 (1862)年 | 4月24日 土佐高岡郡佐川村(現佐川町)に生まれる |
| 明治17 (1884)年 | 上京し、東京大学理学部植物学教室へ出入りする |
| 明治22 (1889)年 | 日本で初めて新種ヤマトグサに学名をつけ発表する |
| 明治26 (1893)年 | 帝国大学理科大学助手となる |
| 明治33 (1900)年 | 「大日本植物志」第一巻第一集刊行 |
| 明治45 (1912)年 | 東京帝国大学理科大学講師となる |
| 大正5 (1916)年 | 「植物研究雑誌」を自費創刊 |
| 大正15 (1926)年 | 東京府北豊島郡大泉村土土支田557に居を構える(現在の練馬区立牧野記念庭園) |
| 昭和2 (1927)年 | 理学博士の学位を受ける |
| 昭和3 (1928)年 | 壽衛夫人永眠、スエコザサを命名 |
| 昭和12 (1937)年 | 朝日文化賞を受ける |
| 昭和14 (1939)年 | 東京帝国大学理学部講師を勤続47年で辞任 |
| 昭和15 (1940)年 | 「牧野日本植物図鑑」刊行 |
| 昭和26 (1951)年 | 第一回文化功労者となる |
| 昭和28 (1953)年 | 東京都名誉都民となる |
| 昭和32 (1957)年 | 満94歳 永眠 |
- 没後従三位勲二等旭日重光章および文化勲章が授与される

Dr. Tomitaro Makino
1862-1957



植物学教室の助手室で



壽衛夫人と



庭で仲間たちと

練馬区立 牧野記念庭園

- 所在地 練馬区東大泉6-34-4
 - 面積 2,576.22㎡
 - 開園 昭和33(1958)年12月1日
 - リニューアルオープン 平成22(2010)年8月1日
 - 入園料 無料
 - 開園時間 午前9時～午後5時
 - 休園日 毎週火曜日(火曜日が祝休日にあたる場合は、その直後の祝休日でない日)、年末年始(12月29日～1月3日)
 - 電話番号 03-6904-6403
- ※障害者用駐車場(1台)があります(事前にご予約ください)
(令和4(2022)年3月)

ウェブサイトはこちら▼



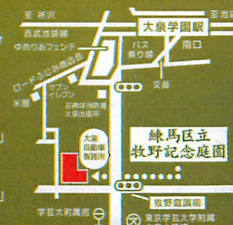
交通案内

- 西武池袋線・大泉学園駅下車(南口)徒歩5分
- JR中央線・西武新豊線からバスで「学芸大前」下車、徒歩3分

主なバス経路

- 飯塚駅/上井草駅から、西武バス「長久保行」
- 西武池袋線/池袋駅西口から、西武バス、関東バス「大泉学園南口行」
- 吉祥寺駅/武蔵関駅から、西武バス「新道東行」「都民公園セコニック行」他

表紙: 朝日とスエコザサ、剪定ばさみ



園内で牧野富太郎博士について知る

生涯に発見・命名した植物は1500種類以上にのぼり、日本の植物分類学の基礎を築いた博士。園内には、博士が使っていた書屋や博士の生涯を紹介した展示室などがあり、博士の業績を知ることができます。

※建物の位置を示す地図は内側面にあります。

記念館

記念館は、博士の遺品や関連資料を展示する施設で、博士が亡くなるまで暮らしていた邸宅の跡地に建てられました。現在の建物は、内藤廣氏の設計による2代目の記念館で、平成22年8月にリニューアルオープンしました。



書斎にて



建屋展示室

牧野富太郎博士ゆかりの植物を楽しむ

牧野記念庭園に一步足を踏み入れれば、周囲の喧騒は薄れ、今も博士が座り込んで植物を観察しているような穏やかな時間が流れています。園内には、ねりまの名木に指定されているヘラノキやサクラ‘仙台屋’のように博士が全国各地から集めた植物と、コナラ、エゴノキといった武蔵野の雑木林の面影を残す植物が生育しています。ここでは時が経つのを忘れて博士が植物を見つめていたように、ゆっくりと植物と向かい合って、植物の姿かたちや季節の移り変わりをお楽しみください。



博士命名の植物

一般的に使われていない学名や記載が見当たらない植物を含みます。

ねりまの名木

練馬区内にある練馬を象徴するような大木や古木などを指定したものです。

科名は『新分類 牧野日本植物図鑑』を参照し、栽培品種名は「種名 栽培品種名」とし、種名が明らかでない種類については、総称をあてている。

① スエコザサ (イネ科)



アズマザサの変種で牧野博士が昭和2年に仙台で発見した。妻・壽衛への感謝と愛情をこめて、『Sasa Suwekoana Makino』と命名し、スエコザサという和名を与えた。博士は風が吹くときさやさと懐かしい音をさせるササに、妻の姿を重ねたようである。園内では博士の胸像や顕彰碑・歌碑の周辺に生育している。



② ヒメアジサイ (アジサイ科)

博士が戸隠の山麓で見つけ、その名をつけた。博士は自宅の庭に植えて愛でたが、一度庭園では絶えてしまった。博士の次女・鶴代氏が高知県立牧野植物園に贈ったものが系統保存され、令和4年に博士生誕160年を記念し里帰りした。

③ オオキツネノカミソリ (ヒガンバナ科)



関東以西の山地に生える多年性草本。牧野博士がキツネノカミソリとの違いを見出し、花がより大きく、雄しべが花被片より長く突き出る特徴をもつ、花の様子を度々描いたスケッチが残されている。



④ ヘラノキ (アオイ科)

本州近畿以西、四国、九州の山地に点々と分布し、牧野博士が命名した落葉高木。牧野博士が九州の知人から苗を取り寄せて植えている。秋にはへら状の総苞葉が風を受け、遠くへ飛ばす様子が見られる。



⑤ タモノカンアオイ (ウラボシ科)

関東地方多摩川附近の丘陵に特産する多年生草本。春、光沢のある葉の下を覗いてみると、土に半ば埋もれるかのように咲く花を見つけることができる。牧野博士が発見し命名した植物。

⑥ ニシキマンサク (マンサク科)



日本海側などの多雪地に分布するマルバマンサクの一品種で、花びらの基部が紅色になる。博士が命名していて、『牧野日本植物図鑑』の初版の口絵で「頗る異彩あることこの図上に見るが如し」と紹介している。



⑦ ウバユリ (ユリ科)

和名は花期には葉が枯れてなくなることから歯がない筈に見立てつけられている。一般的なユリは葉が細く平行脈だが、ウバユリは網状脈の大きな葉をもつ。牧野博士が属を改めた命名植物。



⑧ シロヤマブキ (バラ科)

和名はヤマブキに似て、かつ白い花をつけることによるが、ヤマブキは葉が互生し花びらが5枚なのに対し、シロヤマブキは葉が対生し花びらが4枚である。牧野博士が文献を整理して正しく記載しなおした命名植物。

⑨ カタクリ (ユリ科)



落葉樹の葉が開く前の早春に、葉を出して花を咲かせる。鱗茎から良質のでんぷんがとれ、これが真正の片栗粉。博士が暮らした当時は近隣にも生育していたが、現在都内で見られるのは珍しい。



⑩ ユキワリイチゲ (キンポウゲ科)

本州の近畿地方以西、四国、九州の山麓の樹林内などに生える多年草。葉は秋に地上に出て冬を越す。早春の頃、淡紅紫色の花をつけ日が当たると開く。牧野博士が郷里の佐川町から持ち帰り植えている。



⑪ ウメ ‘緑萼梅’ (バラ科)

一般的なウメは紅褐色のがくであるのに対して、緑色のがくをもつ。前年の枝は緑色で光沢があり、花はその枝に1〜3個つく。庭園のものは雄しべの一部が白色の花びらになる八重咲の品種。牧野博士の命名植物。

⑫ シロバナマンジュシャゲ (ヒガンバナ科)



ヒガンバナとシショウキズイセンの雑種とされる。九州の知人から鱗茎を得て植えている。ヒガンバナと同時に咲き、博士は「混植しておく」と紅白相映して頗る美しい」と愛でていた。



⑬ ヒユラギ ‘ヒツツバヒユラギ’ (モクセイ科)

ヒユラギの葉の特徴である大形の鋸歯とその先の鋭い刺があまり変種。石神井で栽培されていたものを譲り受けたもの。花のない時期には何であるかわかりにくく、博士が植えた頃はもとより現在でも珍しい木といえる。



⑭ キンモクセイ (モクセイ科)

花は橙色で芳香があり、庭樹として広く植えられるが、日本では雌株は見られず雄株のみが見られる。植えられている位置はちょうど住居の玄関前にあたる。牧野博士がギンモクセイの変種として記載した命名植物。



3月上旬～下旬



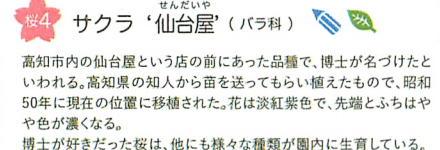
4月上旬～中旬



4月上旬～下旬



3月下旬～4月上旬



高知市内の仙台屋という店の前にあった品種で、博士が名づけたといわれる。高知県の知人から苗を送ってもらい植えたもので、昭和50年に現在の位置に移植された。花は淡紅紫色で、先端とふちはやや色が濃くなる。博士が好きだった桜は、他にも様々な種類が園内に生育している。



3月下旬～4月上旬



4月上旬～中旬



2月下旬～3月中旬



4月下旬



4月上旬～中旬



※現在花はつけていません

書籍の博覧を要す

たくさん本を読むことが必要である

青年の時に立てたこの志のとおり、富太郎は古今東西の書籍を買い漁り、膨大な知識をその身に取り込んで植物研究の道を独学で切り開いていきます。そんな富太郎のそばには、どんな時にもたくさんの本がありました。



富太郎コレクション

小学校を2年で自主退学し、自分で勉強する道を選んだ牧野博士にとって、「たくさん本を読んで知ること」はとても大事でした。



これはコレクションのほんの一部。博士の集めた本はすべて、植物につながっているんです。

約4万5千冊の貴重な本は高知県立牧野植物園に寄贈され、大切に保管されています。



学者はケチではいけない

安月給でも植物研究のための借金はいとわなかった富太郎。妻の壽衛は借金取りのあつかいもうまく富太郎の研究をしっかり支える相棒でした。そんな二人を家族はのちにこう語っています。「この夫婦の考え方は、ふつうとはちがう」「二人は徹底した“のんき者”」

本を家とせず、友とすべし

「本を読んで安心するだけでなく、間違っていたら正せる友だちのように、本とつきあうべし」と志した牧野博士は、同じ本でも版がちがえば買うというマニアックぶり。植物を研究するためだからと堂々と借金をする、そんな博士を支えたのは、牧野家の人たちでした。



玄關先の富太郎と壽衛



個人蔵

牧水龍を平す直でひなたぼっこの富太郎とチーコ 写真提供：高知県立牧野植物園

2. 書齋、一階へ移る

座敷を書齋にすると、一階のほかの部屋も本やら標本やらでいっぱい。だんだん家がガタビシはじめ、部屋の戸が開まらなくなって、大変なことに。



3. 最後の書齋

新しく建てた家に書齋を移したあと、牧野博士は全国から届く植物への質問に返事をしたり本の原稿を書いたり...90歳を過ぎても「心は花の真盛り」と大好きな植物の勉強を深夜までしていました。



この部屋を再現しました！



『書齋の牧野博士』博松正利画(昭和23年)



原稿を執筆する最晩年の富太郎

個人蔵

遅い時間にお茶など持って父の部屋に参りますと、仕事に熱中しておりますから「お茶を差し上げましょう」というとびっくりして飛び上がる。そのくらい無我の境地に入っているんです。

——次女 鶴代



再現された繇条書屋

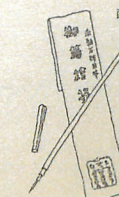
いまでも残されている富太郎の書齋を昭和27~28年頃の様子を伝える場所に蘇らせました。富太郎の蔵書の表紙を、高精細カメラで撮影し本にしたものや手描きしたもの、富太郎を慕う人たちの本や複製した文房具などが、ぎゅっと詰まった空間です。



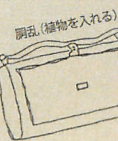
博士の気配が感じられるような書齋です。



パイロットの万年筆



Tomitaro's 書齋をいろいろ 富太郎の愛用品たち favorite items



種子島鉄



ヤマトのり

時給筆

開孔(緑物を入れる)

標本箱

父は自分の持っているものに対する愛着が非常に強い人で、ペンとかハサミ、それから植物を掘ります根掘りなど、自分の持っているものに対する愛着は大変なものです。

次女 鶴代

父は自分の持っているものに対する愛着が非常に強い人で、ペンとかハサミ、それから植物を掘ります根掘りなど、自分の持っているものに対する愛着は大変なものです。

次女 鶴代

父は自分の持っているものに対する愛着が非常に強い人で、ペンとかハサミ、それから植物を掘ります根掘りなど、自分の持っているものに対する愛着は大変なものです。

次女 鶴代

父は自分の持っているものに対する愛着が非常に強い人で、ペンとかハサミ、それから植物を掘ります根掘りなど、自分の持っているものに対する愛着は大変なものです。

次女 鶴代

父は自分の持っているものに対する愛着が非常に強い人で、ペンとかハサミ、それから植物を掘ります根掘りなど、自分の持っているものに対する愛着は大変なものです。

次女 鶴代



牧野博士を好きな人たちの思いが集まりました。



愛蔵書を模して色鉛筆で手描きしたもの



二階の書齋にて(昭和12年) 個人蔵

1. 本の重みで玄関の障子が曲がる



二階にあった最初の書齋は、足の踏み場もないくらい本がいっぱいで床に穴も開きました。

富太郎の書齋クロニクル—書齋の変遷—